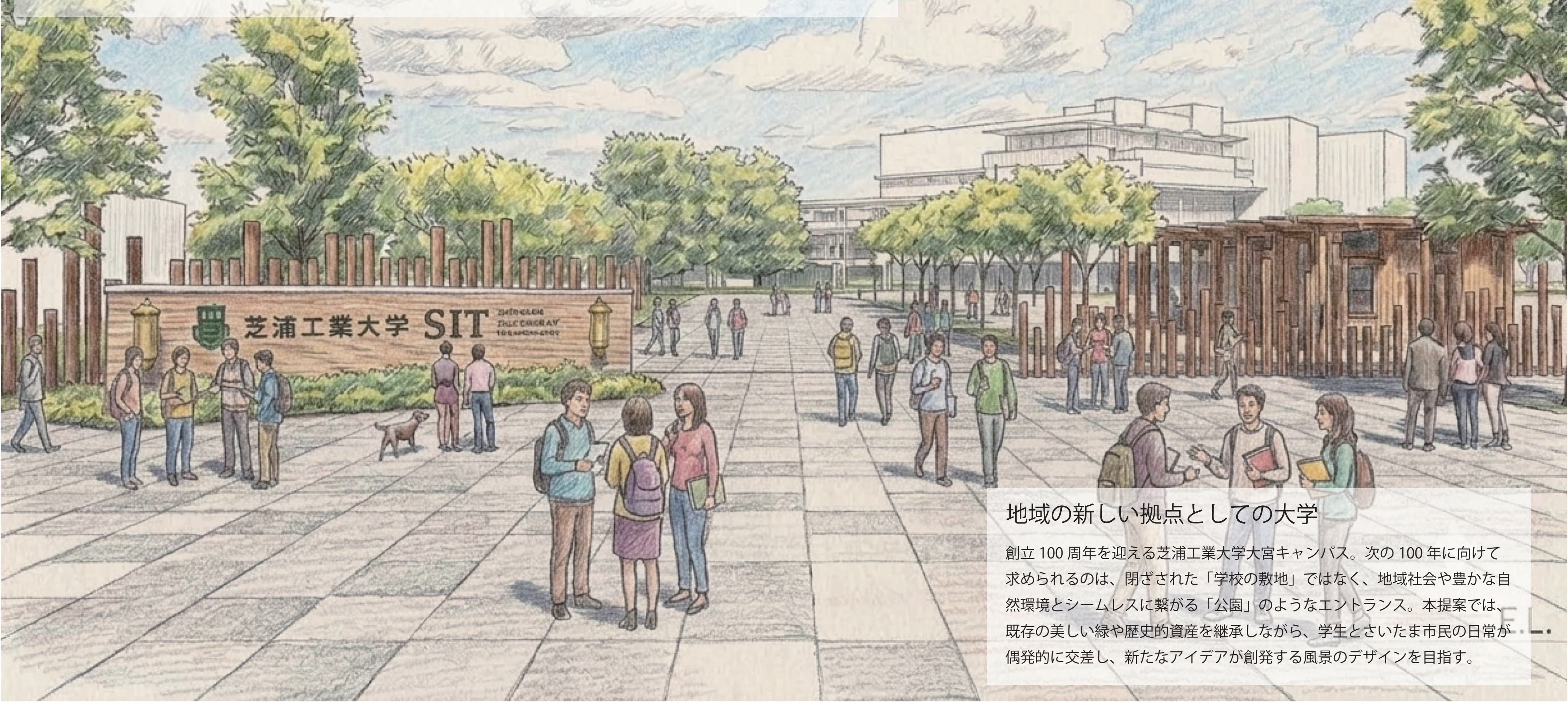


キャンパスを、まちの『公園』に。

～緑が育む、地域と大学の新しい日常～



地域の新しい拠点としての大学

創立 100 周年を迎える芝浦工業大学大宮キャンパス。次の 100 年に向けて求められるのは、閉ざされた「学校の敷地」ではなく、地域社会や豊かな自然環境とシームレスに繋がる「公園」のようなエントランス。本提案では、既存の美しい緑や歴史的資産を継承しながら、学生とさいたま市民の日常が偶発的に交差し、新たなアイデアが創発する風景のデザインを目指す。

01 住宅と大学の共存

東大宮と芝浦工大

芝浦工業大学の大宮キャンパスが開校したのは、東大宮駅が開業したわずか 2 年後の 1966 年。

東大宮という街が「住宅街」として本格的に形成されていくプロセスと、キャンパスの歴史はほぼ完全に重なっています。東大宮は住民の生活と、学生の活気が 60 年間にわたり共存してきた街である。



出典：東大宮五丁目自治会 WEB

02 「動」の交差点・「静」の灯り

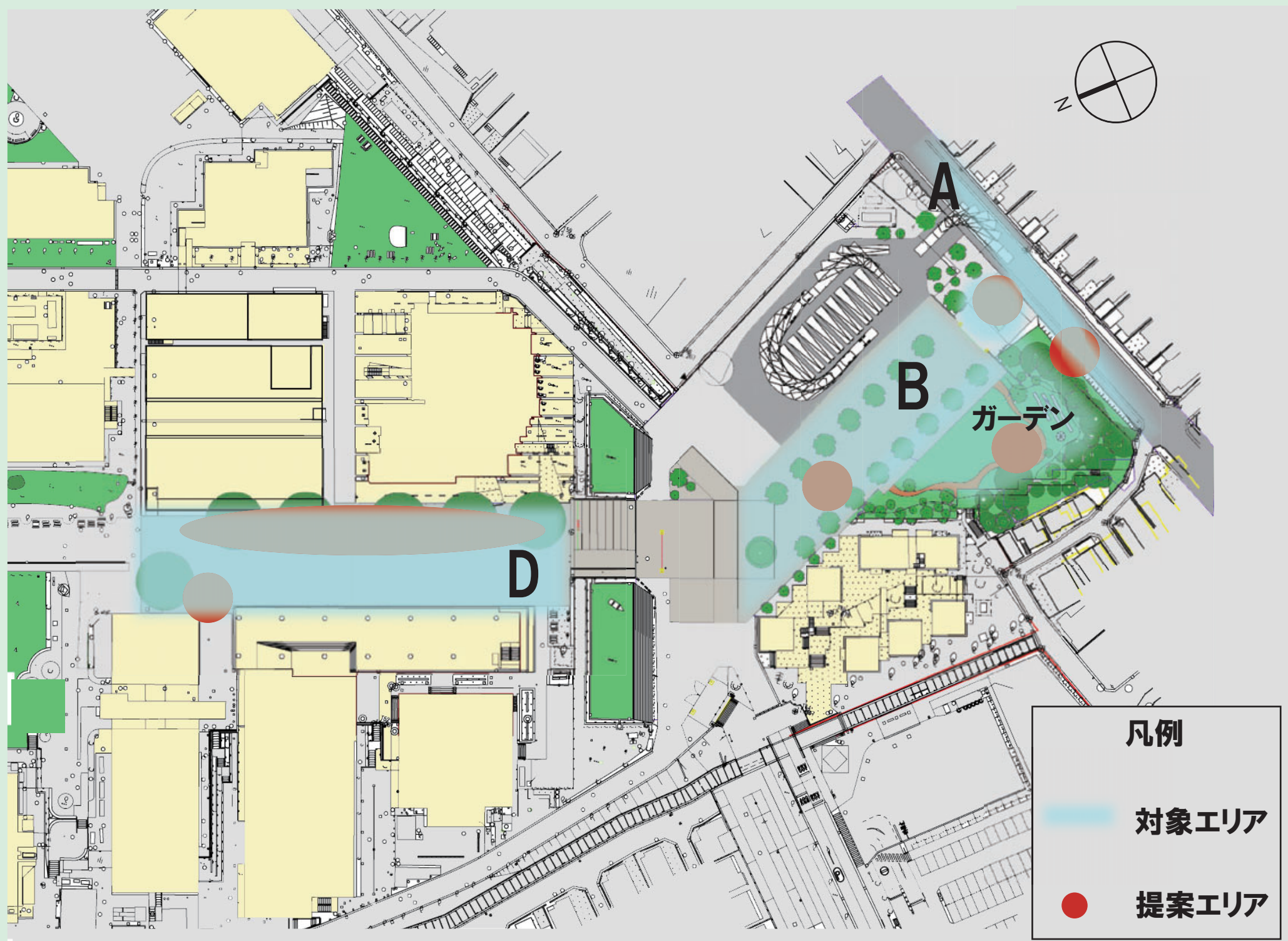
昼：創発と交流が交差する「動」の広場

昼間は、キャンパスが最も活動的になる時間であり、O-BASE 前に広がる広々としたウッドデッキや芝生広場は、学生たちの創発的な学びや議論の場であると同時に、地域住民が散歩や休息に訪れる「街のリビング」としての役割を担う。カフェのテラス席や木陰のベンチでは、学生と地域の人々の生活動線が自然に交差する。

夜：街に記憶と安らぎを灯す「静」のランタン

夕暮れと共に、キャンパスの表情は「動」から「静寂」へと移り変わります。歴史展示館や新正門などの建築群は、日没とともに閑静な住宅街の夜に安心感を与える。学生にとっては一日の終わりに思索を深める落ち着いた学びの空間となり、地域住民にとっては帰路を導き、街の治安を守る穏やかな風景をつくる。

03 各ゾーンの方針



配置図 S=1/500

04 A ゾーン

A ゾーンでは、「地域に開かれた大学」というコンセプトを設定した。

最大の特徴は、樹木の手前にあったフェンスを撤去し、豊かな植栽によって空間を緩やかに仕切った点である。歩道への圧迫感を解消するとともに、視線が奥へと自然に抜けることで、歩行者空間に広がりや開放感をもたらす。植栽と木調のベンチを交互に配置することで、歩行者が気軽に足を止めて憩い、地域の人々が自然に集い交流できる、居心地の良い歩行者空間を形成している。夜間では、安全性の向上を図った。ベンチや植栽、緑石の足元に温かみのある間接照明を適度に設けた。歩道全体を優しく包み込むように照らすことで暗がりを抑え、誰もが安心して歩ける環境を確保している。これに加え、景観性にも配慮しており、植栽や樹木を照らす光が昼間とは異なる表情の歩行者空間を創り出している。このように、安全性と魅力的な夜間景観の演出を両立させている。



05 正門

新正門は、温かみのある色彩で人々優しく迎え入れる、親しみやすい構えとした。芝浦工業大学のシンボルの高さは 1.6m として、両側には旧校舎のランタンを添えた。背後にはスライド式の門としても機能する高さ 2~3m の木のフェンスを配置した。隙間から学内のような心地よく見れるデザインとし、門が閉じた状態でも圧迫感を与えず透明感と開放感をキープしている。意匠性と機能性を両立し、「地域に開かれた大学」の顔となる景観を創出した。



06 B ゾーン

昼間は迎え入れる道として、キャンパスへの期待感や高揚感を高めるアプローチ空間、夜間は送り出す道として、安らぎと安心を感じる空間を目指した。中央の主動線の先に佇む象徴的なクスノキへと自然に視線が導かれるよう軸線を意識し、並木空間を創出している。並木には単幹の 4~6m のソコゴを採用し、人びとにとって心地よいスケール感と木陰を提供するとともに、キャンパスへ向かうアプローチに潤いを与えている。また、左右の並木で異なる役割を持たせ、機能性と滞留性を追求している。右側には立ったまま気軽に利用できるカウンターを設置し、待ち合わせ場所やバス利用者の待ち空間として短時間の利用を想定している。一方、左側はガーデンエリアとの連続性を重視し、視線と動線が通り抜ける開放的な空間とした。夜間は、安全性と景観性に配慮した空間を形成した。ソコゴはアップライトで優しく照らし、クスノキのライトアップもすることで、夜でもアイキャッチとして印象的な演出をしている。さらに、路面に埋め込んだ照明の光が歩行者を安全に導くことで、送り出す空間を創出している。



07 ガーデンエリア

新正門を抜けると、右側にはバス停を含む流動的な空間が広がり、人々の往来がある。対照的に左側のエリアは、人々の滞留を生み出すことを想定し、ガーデンエリアとして芝生を敷き詰めた。特に、卒業生寄贈の記念樹の周囲にはベンチを設置し、寄贈された大切な木を身近に感じ、くつろげる空間として活用している。このガーデンエリアが、キャンパスの新しい憩いの場となることを期待している。



08 D ゾーン

D ゾーンには、キャンパス内に新たな憩いと交流の場を創造する「パークレット」を導入した。斎藤記念館前から O-Base までを一直線のウッドデッキのように繋ぐことで、視覚的な連続性と歩きやすさを両立させている。3 号館前の憩いの空間にはデジタルサイネージを設置した。休息場所にとどまらず、ウェブサイトの「学内 NEWS」や最新情報を映し出す計画である。これにより、学生や教員が自然と情報を共有し、活発に情報交換を行える場となるよう考案した。従来は暗いコンクリート舗装が敷かれ、キャンパス全体に沈んだ印象を与えていた。この課題解決のため、明るい色のタイルを採用して歩道を刷新した。視覚的な明るさと情報発信機能を併せ持つ D ゾーンは、キャンパスの新しい顔へと生まれ変わる。

